

研究ノート

アウグスティヌスにおける「神の国」の意義

松田 禎二

1

アウグスティヌスにおける「神の国」 *civitas Dei* の意義を、彼の大著『神国論』の分析を通して解明してみよう。まず「神の国」という場合の「国」 *civitas* は、いかなる内容をもつ概念であろうか。アウグスティヌスは国を定義して、「国とは、ある社会的絆によって結合された多くの人々にほかならない」と言っている⁽¹⁾。ここから我々は、国がその領土や機構の点からでなく、むしろ人間という観点から、多くの人々の社会的集団として捉えられていることが分かる。事実、『神国論』の中で、国はしばしば「社会」 *societas* と言い換えられているのである⁽²⁾。例えば第15巻では、「これら（人類の二つの種類）を我々は神秘的に二つの国、つまり人々の社会と呼ぶ」と述べられている⁽³⁾。ここで「神秘的に」 *mystice* という語は、R・H・パローの解釈によれば、比喩的に *allegorically* あるいは陰喩的に *metaphorically* という意味であって、その比喩ないし陰喩は聖書から採られている⁽⁴⁾。そういえば確かに第14巻では、「我々が聖書に従って正当にも二つの国と呼ぶことのできる人類の二つの社会以外には存しない」と断言されている⁽⁵⁾。ところでアウグスティヌスはさらに国を内面的に規定して、「国とは、心を同じくする多くの人々にほかならない」と言っている⁽⁶⁾。では、多くの人々が心を同じくするのは、一体いかなる場合であろうか。思うにそれは、何かある一つのものに人々の心が集中し、その一つのものを中心として相互に多くの心が結ばれ合う場合ではなかろうか。アウグスティヌスは『詩篇』の中的一句、「神によりすがること吾にとりて善きことなり」を重んじて、⁽⁷⁾『神国論』の中でいくたびとなく、神に固着すること *adhaerere Deo* は人間にとって

善であると強調している⁽⁸⁾。例えば第10巻では、「我々の善は神に固着すること以外の何ごとでもない。我々の知性的な魂は、言うなれば神との形なき抱擁によって、真実の徳をもって満たされ豊かにされる。かかる善を心のすべてをあげて、魂のすべてをあげて、力のすべてをあげて愛することが命ぜられている」と言っている⁽⁹⁾。そこでさらに第12巻では、「かかる善を共通にする者たちは、彼らの固着する神と共に、また相互に聖なる社会をなし、一つの神の国である」と述べられるのである⁽¹⁰⁾。

さて、「神の国」の存在を証するのはかの聖書であるが、かかる「神の国」はいかにして生じたのであろうか。我々はその起源を尋ねてみよう。アウグスティヌスは第11巻において、「私は聖なる国の起源について語ることを決心したので、この国の大部分を占め、決して遍歴していないだけにより幸福である聖なる天使たちに関する⁽¹¹⁾ことを、まず初めに語らなければならないと考える」と言っている⁽¹²⁾。彼はまた同じ巻の別の箇所で、「この可死的な生のなかを遍歴しているのではなく、常に天上にあって不死的である神の国について、すなわち神に固着して離反しなかったし、また決して離反しないであろう聖なる天使たちについて、できうるかぎり説明してみよう」とも言っている⁽¹³⁾。我々はこれらの箇所から、「神の国」の大部分を占めるのが実は聖なる天使たちであること、そして彼らは地上を遍歴せず天上にあって幸福であることを確認するのである。事実、「聖なる天使たちは彼らの天上の住まいにおいて、神と共に永遠ではないけれども、しかしその永久で真実なる幸福は安全にして確実であることを誰も疑ってはならない」と言われている⁽¹⁴⁾。だが、彼らが神に固着して離反しなかったと語られているのは、何を意味するのであろうか。アウグスティヌスは、かつて天上で演ぜられた天使たちの間の出来事を、次のように物語っている。「天使たちのうちであるものは、すべてのものに共通の善である神自身に、その永遠性と真理と愛とに確乎としてとどまったのに対して、他のあるものはむしろ自己の力を喜び、あたかも自己にとっての善が自己自身であるかのごとく、すべてのものに共通のよりすぐれた至福なる善から、自己の固有な善へと墮したのである。……そこで前者の幸福の原因は神に固着していることであり、これに反して後者の不幸の原因は神に固着していないことである、と理解しなければならない⁽¹⁵⁾。」そもそもアウグスティヌスの考えによれば、神は唯一の単純で不変的な善であり、この神によって ab Deo 無から de nihilo 創造されたものはすべて善きものではある

が、しかし単純でなく可変的な善である。だが、知性的存在である天使や人間はその自由意志によって最高善たる神に固着し、もって幸福であるような仕方⁽¹⁶⁾で創造されている。そこで神に固着しないことは、天使や人間の本性に反する欠陥であって不幸を招くのである。ともあれ天上の序曲において一部の天使は墮落し、かくて天使たちのうちに分裂が生じたのであるが、良き天使と悪しき天使との間の相反する傾向は本性と根元の相違に基づくのではなく、というのは両者いずれも神によって創造されたのであるから、あくまでも意志と欲求に基づくことは疑えない。すなわち悪しき天使は自己の悪しき意志によって墮したのであり、いわゆる高慢 *superbia* から不幸になったのである。そして「高慢とは、ひずんだ高ぶりへの欲求以外の何であるのか。けだしひずんだ高ぶりとは、魂が固着すべきものから離れて、ある仕方⁽¹⁷⁾で自己を根元となし、かつ根元であることである。」⁽¹⁸⁾こうして天使たちの間に生じた分裂によって二種類の天使の集団が成立し、その二つの集団に基づいて二つの国、つまり「神の国」*civitas Dei* と「地の国」*civitas terrena* の起源がおかれたのである。

2

さてアウグスティヌスは、聖なる天使たちの構成する「神の国」を「天の王国」⁽¹⁹⁾ *regnum caelorum* とか、「天上のエルザレム」⁽²⁰⁾ *superna Hiersalem* と呼んでいるが、それは我々といかなる関係にあるのであろうか。第10巻には次のように記されている。「これがもっとも輝かしい神の国である。それは唯一の神を知り、且つ崇める。聖なる天使たちはかかる神の国を告げ知らせ、我々をその社会へ招いて、我々がその国の市民となることを欲している。」また第11巻にはこう述べられている。⁽²¹⁾「この労苦に満ちた遍歴において、我々がその社会ないし集団にあこがれるところの聖なる天使たちは、永続的な永遠性をもつごとく、また容易なる認識や幸いなる休息を有している。彼らは実にたやすく我々を助けるのであるが、それは彼らが純粹で自由な靈的活動のゆえに労することがないからである。」⁽²²⁾これらの箇所から、我々は聖なる天使たちが天上の神の国に我々を招き、かつ地上を遍歴している我々を助けることを知るのである。実際アウグスティヌスは、「天上の神の国とこの世で遍歴しているその子ら」⁽²³⁾ とか、「自由な神の国、すなわち天における真実の永遠なるエルザレ

ム、その子らは神に従って生きている人々で地上では遍歴している」と言っている⁽²⁴⁾。こうして我々は「神の国」の子ら filii として、聖なる天使たちと密接な関係をもつ。そこでアウグスティヌスは言う。「我々は彼ら（聖なる天使たち）自身と共に一つの神の国である。……その一部分は我々において遍歴し、他の一部分は彼らにおいて助けるのである。⁽²⁵⁾」我々はさらに「神の国」の構成を、人間に視点を移して考察していってみよう。

アウグスティヌスは地上における「神の国」を、「主なるキリストのあがなわれた家族」とか、「王たるキリストの遍歴の国」と呼んでいる⁽²⁶⁾。彼によれば、永遠の祖国 aeterna patria に市民を集めるのは罪のゆるしによってであり、キリストは多くの悪によって腐敗し汚れている世から、至るところで徐々にその家族を引き出して、輝かしい永遠の国を建設するのである⁽²⁸⁾。そしてこの世においては、神に従って生きながら遍歴している聖なる「神の国」の市民たちは、その遍歴の途上にある限り、天上の祖国 *superna patria* の平和を希求しつつ、信仰によって生きる⁽³⁰⁾。ただし、「信仰はまだ実際に見ていないものを希望して待つときにこそ、信仰である⁽³¹⁾」から。こうして「神の国」の建設者にして王たる者はキリストである⁽³²⁾。アウグスティヌスは第18巻において、「キリストによる同じ一つの信仰は、神の国、神の家、神の寺院に予定された者たちのすべてを神のもとに導く」と言っている⁽³³⁾。また第9巻には、「永久に真実であり、且つ真実に永久である神の王国とその栄光に予定された者たち」という言葉も見出される⁽³⁴⁾。つまり神の知恵は、一部の天使の墮落によって生じた神の国の空席を、断罪された人類からさえも満たすという考慮に欠けてはいなかった⁽³⁵⁾のである。アウグスティヌスによれば、神はすべてのことを予知するので、むしろ人祖が罪を犯すであろうことに無知ではなかった。しかし神は、善く創造した人間がいかんにして悪くなるか、ということと共に、いかなる善をその人間からさえも作り出すか、ということを知⁽³⁶⁾した。すなわち、「神はその恩恵によって敬虔なる民が世嗣に召され、罪のゆるしによって義とされ、聖霊によって永遠の平和のうちにある聖なる天使たちに結合され、最後の敵なる死が滅ぼされることを予知した⁽³⁷⁾」のである。こうして人類に関する限りで、「神の国」と「地の国」という二つの国の起源は、人祖において神の予知に基づいておかれた。というのも、人類はかの人祖から発生すべきであり、そしてある者は罰によって悪しき天使と結合され、他の者

は恩恵によって善き天使と結合さるべきであったからである。⁽³⁸⁾そこでアウグスティヌスは言う。「四つの国、つまり天使たちの二つの国と人間たちの同数の国があるのではなく、むしろ二つの国、すなわち二つの社会がある、と言うのが正当である。天使だけでなく人間をも含むところの善き者たちの国と悪しき者たちの国とである。⁽³⁹⁾」しかし我々は人間に関する限りで、二つの国の関連をさらに追究していってみよう。

3

アウグスティヌスは第15巻において、「我々は人類そのものを二つの種類に区分する。その一つは人間に従って生きる者たちであり、他は神に従って生きる者たちである。なお、これら二つの種類を我々は神秘的に二つの国、つまり人々の二つの社会と呼ぶのであるが、その一つは神と共に永遠に支配すべく、他は悪魔と共に永遠の罰を受くべく予定されている」と言っている。⁽⁴⁰⁾確かに、人祖の墮落による人類の断罪を重視して、神の世界経綸の立場に立つならば、人間は「神の国」 *civitas Dei* か「悪魔の国」 *civitas diaboli* かのいずれかに、初めから予定されていると言わざるをえないであろう。⁽⁴¹⁾しかし、神の真意を完全に理解することは不可能であり、それにまた神の予知・予定と人間の自由意志に基づく行為とは、矛盾対立するものでもない。⁽⁴²⁾かかる観点に立つならば、人類を「人間に従って生きる者たち」 *qui secundum hominem vivunt* と、「神に従って生きる者たち」 *qui secundum Deum vivunt* とに区分することは妥当である。アウグスティヌスは第14巻において、「我々が聖書に従って、正当にも二つの国と呼ぶことのできる人類の二つの社会以外には存しない。その一つは肉に従って生きることを欲する者たちであり、他は霊に従って生きることを欲する者たちである」と述べているが、⁽⁴³⁾ここで「肉に従って生きることを欲する者たち」 *qui secundum carnem vivere volentes* とか、「霊に従って生きることを欲する者たち」 *qui secundum spiritum vivere volentes* と呼ばれているのは、先の「人間に従って生きる者たち」とか「神に従って生きる者たち」と呼ばれているのに対応する。⁽⁴⁴⁾事実、アウグスティヌスは「霊に従って生きて、肉に従って生きていない、つまり神に従って生きて、人間に従って生きていない神の国の市民たち」という表現をしているのである。⁽⁴⁵⁾しかし、では「神に従って生きる」

secundum Deum vivere とか、「人間に従って生きる」secundum hominem vivere ということは、一体何を意味するのであろうか。

アウグスティヌスは第14巻において、「人間は自分自身に従ってではなく、人間を造った神に従って生きるように、すなわち自分の意志ではなく、むしろ神の意志をなすように、正しく造られている」と言っている。また同じ巻の別の箇所⁽⁴⁶⁾で、「正しい意志は善い愛であり、邪悪な意志は悪い愛である」とも言っている⁽⁴⁷⁾。我々はこれらの箇所から、結局は愛 amor が二つの国を形成する重大な要因であることを知る。かくて、「二つの国は二つの愛によって造られた。地の国は神をないがしろにするまでの自己愛 amor sui によって、天の国は自己をないがしろにするまでの神への愛 amor Dei によってである。」⁽⁴⁸⁾アウグスティヌスはこれと同じ様なことを、また次のごとく断言している。「我々が語っている二つの国を区別する大きな違いは、つまり一方は敬虔な者たちの社会であり、他方は不敬虔な者たちの社会であって、おのおのその社会に属する天使たちと共にあるが、一方は神への愛によって、他方は自己愛によって導かれている、ということである。」⁽⁴⁹⁾実に「神の国」ないし「天の国」civitas caelestis を特色づけるのは、何よりもまず敬虔 pietas であって、「敬虔とは、真の神への偽りのない敬愛である。」⁽⁵⁰⁾次にそれは希望 spes であって、「神の国」の市民は、「人間に従って現世の幸福において生きるのではなく、神に従って永遠の幸福への希望において生きるのである。」⁽⁵¹⁾さらにそれは遍歴 peregrinatio であって、「この邪悪な世においては、あたかも洪水においてのごとく遍歴している神の国」と言われている⁽⁵²⁾。天の国は地上を遍歴している間に、その市民をあらゆる民族から召し出すのである。またそれは恩恵 gratia であって、「地の国の市民は罪によって損なわれた本性によって得られるが、天の国の市民は、罪から本性を自由にする恩恵によって得られる。そこで前者は怒りの器 vasa irae と呼ばれ、後者は憐れみの器 vasa misericordiae と呼ばれる。」⁽⁵⁴⁾またそれは再生 regeneratio であって、「地の国は出生 generatio のみを必要とするが、天の国は出世の汚れを除くために、再生をも必要とする。」⁽⁵⁵⁾

ところでアウグスティヌスは、二つの国をさまざまに表現している。例えば、「神の国」civitas Dei と「人間の国」civitas hominum、「天の国」civitas caelestis と「地の国」civitas terrena⁽⁵⁷⁾、「神の国」と「世の国」civitas saeculi⁽⁵⁸⁾、「神の国」と「悪

魔の国」civitas diaboli⁽⁵⁹⁾, 「キリストの国」civitas Christi⁽⁶⁰⁾と「悪魔の国」, 「再生した者たちの国」civitas regeneratorum⁽⁶¹⁾と「地から生まれた者たちの国」civitas terrigenarum⁽⁶¹⁾などである。普通には「神の国」と「地の国」と言われているが、いま「地の国」に関するアウグスティヌスの表現を集めてみれば、「我々が地の国と呼ぶところの、人間に従って生きるかの社会」⁽⁶²⁾, 「神に従ってではなく、人間に従って生きる国に属する人々」⁽⁶³⁾, 「地の国、すなわち地から生まれた者たちの社会」⁽⁶⁴⁾, 「地から生まれた者たちの国、つまり墮落した天使の支配の下で、人間に従って生きる人々の社会」⁽⁶⁵⁾, 「不敬虔な者たちの国、すなわち社会」⁽⁶⁶⁾, 「明らかに不敬虔な天使と人間との社会であるこの世の国」⁽⁶⁷⁾などである。我々はこれらの表現から、「地の国」について一つの心像を得ることができるが、それは先に我々が「神の国」の特色としてあげたものと正に対照的であろう。しかし二つの国は、世界の終末における最後の審判をへて、それぞれ完結した姿で見られるときには、相互に厳しい対立があるのみであるが、世界の創造から終末に至る間の、この地上における姿で見られるときにはどうであろうか。アウグスティヌスは第1巻において、「確かにこれら二つの国は、最後の審判によって分離されるまで、この世ではもつれ合っており、また互いに混じり合っている」⁽⁶⁸⁾と言っている。してみれば、人間の歴史が展開されるこの地上の世界に関する限り、「神の国」も「地の国」も混然一体として見分けがつかないのである。従来しばしば「神の国」と「地の国」の対立は、「教会」と「国家」の対立として受けとめられてきたが、この理解が正当でないことはもはや明らかであろう。しかし我々は、アウグスティヌスにおける「教会」ecclesia の概念を判明することによって、この点をさらに確認することにしてみよう。果して、教会は「神の国」であるのか。

4

アウグスティヌスが『神国論』の中で、教会を「神の国」と同一視している箇所がないわけではない。例えば、「キリストとその教会なる神の国」⁽⁶⁹⁾, 「聖なる教会である神の国」⁽⁷⁰⁾, 「この世において遍歴している神の国、すなわち教会」⁽⁷¹⁾などがそうである。しかし、現実の可視的教会がそのまま直ちに「神の国」の実現なのではない。だいいち「神の国」はすでに知ったように、此の世においては遍歴者 peregrinus

である。⁽⁷²⁾では教会とは何であるのか。アウグスティヌスは聖書に従って、⁽⁷³⁾教会はキリストの体 *corpus Christi* であり、そして教会の首⁽⁷⁴⁾（かしら）はキリストであると言⁽⁷⁵⁾う。そこでキリストと信徒たちとは、あたかも首と体のように密接な一つの有機体を構成する。さて、「神の国」に等しい真の教会は、世界の創造以前に予定され且つ選ばれた者たちから成るものであ⁽⁷⁶⁾って、世の終りに至るまで、世の迫害と神の慰めの間を遍歴しながら進⁽⁷⁷⁾行する。かかる教会は神の摂理により、敵対によって破滅しないよう繁栄によって慰めを与えられ、繁栄によって腐敗しないよう敵対によって試煉を受けるのである。⁽⁷⁸⁾では現実の可視的教会はどうであろうか。アウグスティヌスは第1巻においても、「神の国は世を遍歴している限り、秘蹟の共同によっては自らと結ばれているが、聖人たちの永遠の分配においては自らと共にいないであろう者たちをもつ」と言⁽⁷⁹⁾っている。してみれば、現実の地上の教会の中には、救いに予定された者も予定されなかった者も混在しているのである。この現状をアウグスティヌスは次のごとく表現している。「そこでこの邪悪な世においては、この悪しき日々⁽⁸⁰⁾にあっては、……多くの見放された者たちが善人たちと混じっており、両者はいわば福音書の地引網の中に集められている。そしてこの世においては、あたかも海の中のように、両者は網の中で区別なくとじ込められて泳ぐ。それは悪人たちが善人たちから分離され、神がその寺院においてのごとく善人たちにおいて、『すべてにおいてすべてとなる (1 Cor. 15. 28)』、その岸⁽⁸¹⁾辺に達する時までである。」やがて両者は穀物打ち場で穀物がひられるように分離されるが、現在の教会の中にはいわゆる小麦も毒麦も混在⁽⁸²⁾していて区別がつかない。しかしそれにもかかわらず、教会が今でも「キリストの王国」*regnum Christi* とか、「天の王国」*regnum caelorum* と呼ばれるのは何故か。それは今でもキリストと共に、キリストの聖徒たちが——彼らについて主が、『見よ、私は世の終りまでいつもあなた方と共にいるであろう (Mat. 28. 20)』と言⁽⁸³⁾われた——支配しているからである。そこで二種類の教会が考えられるであろう。その一つは「現にあるような教会」*ecclesia qualis nunc est* であって、そこでは善人も悪人も共に成長⁽⁸⁴⁾していて全く見分けがつかない。いま一つは「いつかあるであろうような教会」*ecclesia qualis tunc erit* であって、そこでは最後の審判によって分離された善人のみが永遠の平和のうちにある。しかし、将来あるであろう教会は現在ある教会のうちにすでに実現されつつあるのである。⁽⁸⁴⁾

註

- (1) *De civitate Dei*, XV. 8. civitas, quae nihil est aliud quam hominum multitudo aliquo societatis vinculo conligata.
- (2) *Ibid.*, XII. 1. sed duae potius civitates, hoc est societates. *ibid.*, XII. 28. in genere humano societates tamquam civitates duas. *ibid.*, XIV. 9. civitas porro, id est societas impiorum. *ibid.*, XV. 8. nec de altera societate hominum taceretur, quam terrenam dicimus civitatem. *ibid.*, XV. 22. in terrena civitate, id est in terrigenarum societate. *ibid.*, XVI. 5. illa societate secundum hominem vivens, quam terrenam dicimus civitatem. *ibid.*, XVI. 10. civitas, hoc est societas impiorum. etc.
- (3) *Ibid.*, XV. 1. quas etiam mystice appellamus civitas duas, hoc est duas societates hominum.
- (4) R. H. Barrow, *Introduction to St. Augustine*. London. 1950. p. 271.
- (5) *De civ. Dei*, XIV. 1. non tamen amplius quam duo quaedam genera humanae societatis existerunt, quas civitates duas secundum scripturas nostras merito appellare. cf. *ibid.*, V. 19. qui cives non sint civitatis aeternae, quae in sacris litteris nostris dicitur civitas Dei.
- (6) *Ibid.*, I. 15. aliud civitas non sit quam concors hominum multitudo.
- (7) *Psalmus*, 72. 28. Mihi autem adhaerere Deo bonum est.
- (8) *De civ. Dei*, X. 3; X. 6; X. 18; X. 25; XII. 9, etc.
- (9) *Ibid.*, X. 3. Bonum enim nostrum, nullum est aliud quam illi cohaerere, cuius unius anima intellectualis incorporeo, si dici potest, amplexu veris impletur fecundaturque virtutibus. Hoc bonum diligere in toto corde, in toto anima et in tota virtute praecipimur.
- (10) *Ibid.*, XII. 9. Hoc bonum quibus commune est, habent et cum illo (Deo) cui adhaerent et inter se sanctam societatem et sunt una civitas Dei.
- (11) *Ibid.*, XI. 1. Civitatem Dei dicimus, cuius ea scriptura testis est. ... Ibi quippe scriptum est: Gloriosa dicta sunt de te, civitas Dei; et in alio psalmo legitur: Magnus Dominus et laudabilis nimis in civitate Dei nostri, in monte sancto eius, dilatans exultationes universae terrae; et paulo post in eodem psalmo: Sicut audivimus, ita et vidimus, in civitate domini virtutum, in civitate Dei nostri; Deus fundavit eam in aeternum; item in alio: Fluminis impetus laetificat civitatem Dei, sanctificavit tabernaculum suum Altissimus; Deus in medio eius

non commovebitur. His atque huius modi testimoniis, quae omnia commemorare nimis longum est, didicimus esse quandam civitatem Dei.

- (12) *Ibid.*, XI. 9. quoniam de sanctae civitatis exortu dicere institui et primus quod ad sanctos angelos adinet dicendum putavi, quae huius civitatis et magna pars est et eo beator, quod numquam peregrinata.
- (13) *Ibid.*, XI. 28. de civitate Dei, quae non peregrinatur in huius vitae mortalitate, sed immortalis semper in caelis est, id est de angelis sanctis Deo cohaerentibus, qui nec fuerunt umquam nec futuri sunt desertores, ... ut possumus explicemus.
- (14) *Ibid.*, XI. 32. angelos sanctos in sublimibus sedibus non quidem Deo coaeternos, sed tamen de sua sempiterna et vera felicitate securos et certos esse nemo ambigat.
- (15) *Ibid.*, XII. 1. dum alii constanter in communi omnibus bono, quod ipse illis Deus est, atque in eius aeternitate veritate caritate persistunt; alii sua potestate potius delectati, velut bonum suum sibi ipsi essent, a superiore communi omnium beatifico bono ad propria defluerunt ... Beatitudo igitur illorum causa est adhaerere Deo; quocirca istorum miseriae causa ex contrario est intelligenda quod est non adhaerere Deo. cf. XII. 6. Proinde causa beatitudinis angelorum bonorum ea verissima reperitur, quod ei adhaerent qui summe est. Cum vero causa miseriae malorum angelorum quaeritur, ea merito occurrit, quod ab illo, qui summe est, adversi ad se ipsos conversi sunt, qui non summe sunt; et hoc vitium quid aliud quam superbia nuncupetur?
- (16) Cf. *ibid.*, XI. 10. Est itaque bonum solum simplex et ob hoc solum incommutabile, quod est Deus. Ab hoc bono create sunt omnia bona, sed non simplicia et ob hoc mutabilia. cf. *ibid.*, XII. 1.
- (17) Cf. *ibid.*, XI. 33. nos ergo has duas societates angelicas inter se dispares atque contrarias, unam et natura bonam et voluntate rectam, aliam vero natura bonam, sed voluntate perversam. cf. *ibid.*, XII. 1.
- (18) *Ibid.*, XIV. 13. Quid est autem superbia nisi perversae celtitudinis appetitus? Perversa enim est celtitudo deserto eo, cui debet animus inhaerere, principio sibi quodam modo fieri atque esse principium.
- (19) *Ibid.*, XVII. 1. ad civitatem Dei regnumque caelorum. de Christo regnoque caelorum, quae civitas Dei est.
- (20) *Ibid.*, XVI. 31. illa superna Hiersalem, hoc est civitas Dei. cf. *ibid.*, XVII. 3. ad liberam civitatem Dei, id est veram Hiersalem aeternam in caelis.

- (21) *Ibid.*, X. 25. Haec est gloriosissima civitas Dei; haec unum Deum novit et colit; hanc angeli sancti adnuntiaverunt, qui nos ad eius societatem invitaverunt civesque suos in illa esse voluerunt.
- (22) *Ibid.*, XI. 31. Sancti vero angeli quorum societati et congregationi in hac peregrinatione laboriosissima suspiramus, sicut habent permanendi aeternitatem, ita cognoscendi facilitatem et requiescendi felicitatem. Sine difficultate quippe nos adjuvant, quoniam spiritalibus motibus puris et liberis non laborant. cf. *ibid.*, V. 19. in illorum sanctorum angelorum societate, cui se nituntur aptare.
- (23) *Ibid.*, XVII. 3. ad supernam civitatem Dei eiusque filios in hac peregrinos.
- (24) *Ibid.*, XVII. 3. ad liberum civitatem Dei, id est veram Hiersalem aeternam in caelis, cuius filii homines secundum Deum viventes peregrinantur in terris.
- (25) *Ibid.*, X. 7. Cum ipsis enim sumus una civitas Dei, ... cuius pars in nobis peregrinatur, pars in illis opituratur.
- (26) *Ibid.*, I. 35. redempta familia domini Christi et peregrina civitas regis Christi. cf. *ibid.*, XV. 41. propter populum Christianum, in quo Dei civitas peregrinatur in terris.
- (27) Cf. *ibid.*, V. 17 remissio peccatorum, quae cives ad aeternam colligit patriam. *ibid.*, V. 18. pro illa aeterna caelestique patria.
- (28) Cf. *ibid.*, II. 18. his malis tabescenti ac labenti mundo ubique familiam suam sensim subtrahit, qua condit aeternam et non plausu vanitatis, sed iudicio veritatis gloriosissimam civitatem.
- (29) *Ibid.*, XIV. 9. cives sanctae civitatis Dei in huius vitae peregrinatione secundum Deum viventes.
- (30) Cf. *ibid.*, XV. 6. proficientibus bonis et ex fide in hac peregrinatione viventibus. *ibid.*, XV. 6. cives civitatis Dei, in hac terra peregrinantes et paci supernae patriae suspirantes.
- (31) *Ibid.*, XIII. 4. ipsa fides, quae tunc est fides, quando expectatur in spe, quod in re nondum videtur.
- (32) *Ibid.*, XVII. 4. ipsam civitatem Dei, cuius rex est et conditor Christus. *ibid.*, XV. 20. ad Christum pervenit aeternum regem civitatis Dei. *ibid.*, XIV. 13. in eius (civitatis Dei) rege, qui est Christus. *ibid.*, II. 21. in ea re publica, cuius conditor rectorque Christus est. cf. *ibid.*, XXII. 6. Christus autem quamquam sit caelestis et sempiternae conditor civitatis.
- (33) *Ibid.*, XVIII. 47. una eademque per ipsum (Christum) fides omnes in Dei

- civitatem, Dei domum, Dei templum praedestinos perducatur ad Deum.
- (34) *Ibid.*, IX. 21. praedestinos in suum (Dei) regnum et gloriam semper veracem et veraciter sempiternam.
- (35) Cf. *ibid.*, XIV. 26. non defuit utique consilium, quo certum numerum civium in sua sapientia praedestinatam etiam ex damnato genere humano suae civitatis implet.
- (36) Cf. *ibid.*, XIV. 11. Sed quia Deus cuncta praescivit et ideo quoquo hominem peccaturum ignorare non potuit: ... cum Deus praesciendo utrumque praevernerit, id est, et homo, quem bonum ipse creavit, quam malum esset futurus, et quid boni etiam sic de illo esset ipse factururus.
- (37) *Ibid.*, XII. 23. Sed praevidebat etiam gratia sua populum piorum in adoptionem vocandum remissisque peccatis iustificatum Spiritu sancto sanctis angelis in aeterna pace sociandum, novissima inimica morte destructa.
- (38) Cf. *ibid.*, XII. 28. iam tamen secundum Dei praescientiam exortas fuisse existimemus in genere humano societates tamquam civitates duas. Ex illo enim futuri erant homines, alii malis angelis in supplicio, alii bonis in praemio sociandi.
- (39) *Ibid.*, XII. 1. non quattuor (duae scilicet angelorum totidemque hominum), sed duae potius civitates, hoc est societates merito esse dicantur, una in bonis, altera in malis non solum angelis, verum etiam hominibus constitutae.
- (40) *Ibid.*, XV. 1. ipsius generis humani, quod in duo genera distribuimus, unum eorum, qui secundum hominem, alterum eorum, qui secundum Deum vivunt; quas etiam mystice appellamus civitates duas, hoc est duas societates hominum, quarum est una quae praedestinata est in aeternum regnare cum Deo, altera aeternum supplicium subire cum diabolo.
- (41) Cf. *ibid.*, XXI. 1. Cum per Iesum Christum Dominum nostrum, iudicem vivorum atque mortuorum, ad debitos fines ambae pervenerint civitates, quarum est una Dei, altera diaboli.
- (42) Cf. *ibid.*, V. 9 et 10.
- (43) *Ibid.*, XIV. 1. non tamen amplius quam duo quaedam genera humanae societatis existerent, quas civitates duas secundum scripturas nostras merito appellare possumus. Una quippe est hominum secundum carnem, altera secundum spiritum vivere volentium.
- (44) Cf. *ibid.*, XIV. 4. Quod itaque diximus, hinc exitisse duas civitates diversas inter se atque contrarias, quod alii secundum carnem, alii secundum spiritum

viverent: potest etiam isto modo dici quod alii secundum hominem, alii secundum Deum vivant.

- (45) *Ibid.*, XIV. 9. cives civitatis Dei, viventes secundum spiritum, non secundum carnem, hoc est secundum Deum, non secundum hominem.
- (46) *Ibid.*, XIV. 4. homo ita factus est rectus, ut non secundum se ipsum, sed secundum eum, a quo factus est, viveret, id est illius potius quam suam faceret voluntatem.
- (47) *Ibid.*, XIV. 7. Recta itaque voluntas est bonus amor et voluntas perversa malus est.
- (48) *Ibid.*, XIV. 28. Fecerunt itaque civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui.
- (49) *Ibid.*, XIV. 13. profecta ista est magna differentia, qua civitas, unde loquimur, utraque discernitur, una scilicet societas piorum hominum, altera imporum, singula quaeque cum angelis ad se pertinentibus, in quibus praecessit hac amor Dei, hac amor sui.
- (50) *Ibid.*, IV. 23. Pietas est enim verax veri Dei cultus.
- (51) *Ibid.*, XV. 18. hominem, id est hominum societatem, quae non secundum hominem in re felicitatis terrenaе, sed secundum Deum vivit in spe felicitatis aeternaе. cf. *ibid.*, XIX. 4. Sicut ergo spe salui, ita spe beati facti sumus, et sicut salutem, ita beatitudinem non iam tenemus praesentem, sed exspectamus futuram, et hoc per patientiam. cf. *ibid.*, XV. 21. duabus civitatibus, una in re huius saeculi, altera in spe Dei.
- (52) *Ibid.*, XV. 26. Dei civitatem in hoc saeculo maligno tamquam in diluvio peregrinantem. cf. *ibid.*, XVIII. 2. cum peregrina in hoc mundo Dei civitate.
- (53) *Ibid.*, XIX. 17. Haec ergo caelestis civitas dum peregrinatur in terra, ex omnibus gentibus cives evocat.
- (54) *Ibid.*, XV. 2. Parit autem cives terrenaе civitatis peccato vitiata natura, caelestis vero civitatis cives parit a peccato naturam liberans gratia; unde illa vocatur vase irae, ista vase misericordiae. cf. *ibid.*, XV. 21.
- (55) *Ibid.*, XIV. 16. terrena civitas generatione tantummodo, caelestis autem etiam regeneratione opus habet, ut noxam generationis evadet. cf. *ibid.*, XV. 20. duas insinuat civitates, unam terrigenarum, alteram regenerantium.
- (56) Cf. *ibid.*, XV. 5. inter duas ipsas civitates, Dei et hominum, cf. *ibid.*, XV. 1.

- (57) Cf. *ibid.*, XVIII. 54. duarum civitatum, caelestis atque terrena. cf. *ibid.*, XV. 15; XV. 27; XVIII. 2; XIX. 1.
- (58) Cf. *ibid.*, XVIII. 1. De civitatum duarum, quarum Dei una, saeculi est altera.
- (59) Cf. *ibid.*, XXI. 1. ambae civitates, quarum est una Dei, altera diaboli.
- (60) Cf. *ibid.*, XVII. 20. ad civitates duas, unam diaboli, alteram Christi, et earum reges diabolum et Christum. cf. *ibid.*, XX. 11.
- (61) Cf. *ibid.*, XV. 20. duas civitates, unam terrigenarum, alteram regeneratorum.
- (62) *Ibid.*, XVI. 5. illa societas secundum hominum vivens, quam terrenam dicimus civitatem. cf. *ibid.*, XV. 8.
- (63) *Ibid.*, XVI. 10. hominum, id est, ad civitatem pertinentes, quae vivit secundum hominem, non secundum Deum.
- (64) *Ibid.*, XV. 22. in terrena civitate, id est in terrigenarum societate.
- (65) *Ibid.*, XVI. 17. terrigenarum civitas, hoc est societas hominum secundum hominem viventium, sub dominatu angelorum.
- (66) *Ibid.*, XVI. 10. civitas, hoc est societas impiorum
- (67) *Ibid.*, XVIII. 18. de huius saeculi civitate, quae profecto et angelorum et hominum societas impiorum est.
- (68) *Ibid.*, I. 35. Perplexae quippe sunt istae duae civitates in hoc saeculo invicemque permixtae, donec ultimo iudicio dirimantur. cf. *ibid.*, X. 32; XI. 1.
- (69) *Ibid.*, XV. 26. ad Christum et eius ecclesiam, quae civitas Dei est.
- (70) *Ibid.*, VIII. 24. civitas Dei, quae est sancta ecclesia.
- (71) *Ibid.*, XV. 26. peregrinantis in hoc saeculo civitatis Dei, hoc est ecclesiae. cf. *ibid.*, XIII. 16. civitatem Dei, hoc est eius ecclesiam.
- (72) *Ibid.*, XV. 21. in hoc mundo peregrinantis civitatis Dei. cf. *ibid.*, XVIII. 2.
- (73) Cf. *I Cor.* 12. 27; *Col.* 1. 24; *I Cor.* 10. 17.
- (74) Cf. *De civ. Dei*, XXII. 17. corpus Christi, quod est ecclesia. cf. *ibid.*, XX. 5.
- (75) Cf. *ibid.*, XVII. 9. Christus, quod est caput ecclesiae.
- (76) Cf. *ibid.*, XX. 8. ecclesia praedestinata et electa ante mundi constitutionem.
- (77) Cf. *ibid.*, XVIII. 51. usque in huius saeculi finem inter persecutiones mundi et consolationes Dei peregrinando procurrit ecclesia.
- (78) Cf. *ibid.*, XVIII. 51. et rebus prosperis consolatio, ut non frangatur adversis, et rebus adversis exercitatio, ut non corrumpatur prosperis, per divinam providentiam procuratur.
- (79) *Ibid.*, I. 35. etiam Dei civitas habet secum, quamdiu peregrinatur in mundo,

conexos communione sacramentorum, nec secum futuros in aeterna sorte sanctorum.

- (80) *Ibid.*, XVIII. 49. In hoc ergo saeculo maligno, in his diebus malis, ... multi reprobi miscentur bonis et utrique tamquam in sagenam evangelicam colliguntur et in hoc mundo tanquam in mari utrique inclusi retibus indiscrete natant, donec perveniatur ad litus, ubi mali segregentur a bonis et in bonis tamquam in templo suo <sit Deus omnia in omnibus>.
- (81) Cf. *ibid.*, XX. 9. de ecclesia collecturi sunt zizania messores illi, quae permisit cum tritico simul crescere usque ad messem.
- (82) Cf. *ibid.*, XX. 9. ecclesia, quae nunc etiam est regnum Christi.
- (83) Cf. *ibid.*, XX. 9. Ergo et nunc ecclesia regnum Christi est regnumque caelorum. Regnant itaque cum illo (Christo) etiam nunc sancti eius.
- (84) Cf. *ibid.*, XX. 9. Ac per hoc ubi utrumque genus est, ecclesia est, qualis nunc est; ubi autem illud solum erit, ecclesia est, qualis tunc erit, quando malus in ea non erit. cf. *ibid.*, XX. 25.